

生活者の幸福感に関するデータ分析

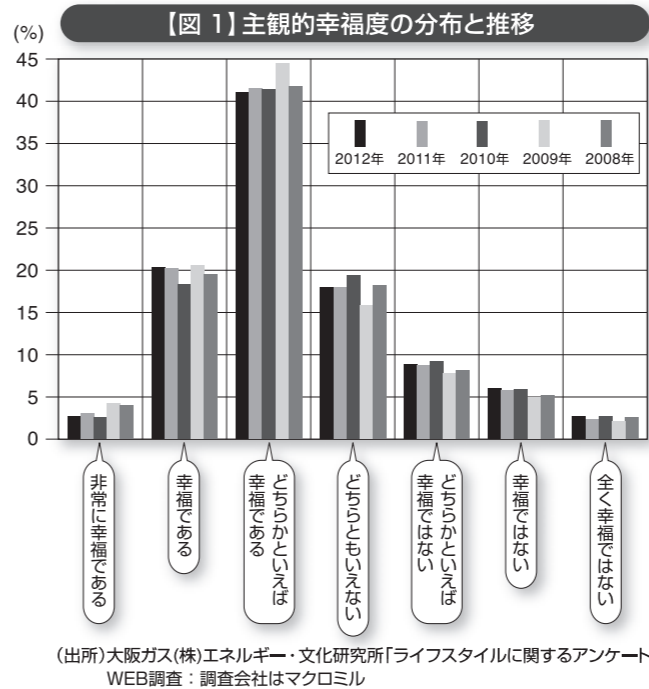
主観的幸福感に影響する要因とは

豊田尚吾

エネルギー・文化研究所(CEL)ではいくつかの方法で生活意識調査を行っており、生活者の主観的幸福感(以下、幸福感)についても毎年きいている。本稿は、幸福感に焦点をあて、それに影響を与える要因に関して考察を行う。

ネット調査(「ライフスタイルに関するアンケート」)では、回答者の幸福感を2008年から継続して調査しており、図1にあるように、年によって、シェアで5%未満程度の動きはあるものの、基本構造の大きな変化は見られない。「どちらかといえば幸福である」という回答を中心に、幸福より偏って分布している。これは、よく似た概念である、生活充足度(2005年からデータ収集)に関しても同じことがいえる。

幸福感に関するデータは、あくまで主観による回答であり、そのあいまいさを信頼できないと評価する見方がある一方、個人の厚生水準を表す指標として、所得などと同様に重視すべきとの主張もある。本稿は幸福感のデータとしての価値を重視する立場に立つ。



幸福感に影響を与える要因

さて、このような幸福感は、どのような理由から形成されるのだろうか。自由回答を見てみると、「家族がいる」「健康である」「経

済(収入が安定している)」「平穩に暮らしている」といった、なるほどと思わせるキーワードが並んでいる。そこで12の選択肢を提示した上で、「あなたにとって、幸福感を感じるためには何が重要だと思いますか」とたずねた。結果は図2の通りである(幸福感に影響を与える要因についての、基礎的な考察に関しては、拙稿「幸福に必要な条件と年齢・性別」(情報誌「CEL」94号所収)で行っている)。

自分や家族の健康が第一、よい家庭やお金がその次に求められる、人間関係に関する選択肢がその次に選ばれている。これも毎年同じ傾向を示す調査結果である。しかし、回帰分析などでは、健康であることが幸福感を高める一番の説明要因とはなっていない。健康の「欠如」は不幸を感じさせる強い原因になることは容易に想像できる。しかし、健康である場合には、それが当たり前になって、日々、それに起因する幸福感を実感できない(忘れがちになる)、いわゆる衛生要因であるからだと考えられる。

では、データとしての幸福感の動きと関係の深い要因とは何であろうか。CELでは、以前決定木分析を用い、「よい家庭が築けている」かどうかなどの評価が幸福感に大きく影響しているとの結論を導いた(前出稿)。そこで「図2の選択肢に対する実感と幸福感との相関係数」を計算してみると、全てが有意(意味のある)に正の関係を持っているとの結果を得た。係数の絶対値が大きいものは「よい家庭が築けている(0.533)」「自分の大切だと思っている人が幸せである(0.498)」などであった。一方、12の選択肢自体がお互いに有意な相関を持っていない。実際、12×11÷2=66全ての組み合わせで有意な正の相関

を確認した。必ずしも各選択肢が正の相関を持っている必然性はない。その意味では、回答者が持つパーソナリティ、すなわちポジティブ志向かネガティブ志向かといった要因が、回答に影響を与えている可能性はある。例えば、ポジティブ志向の人は何かにつけて高い満足度を回答しがちだ、というようなことである。

回帰分析による考察

そのような可能性を意識しながらも、各選択肢(以下指標)が幸福感に影響を与えるという因果関係を想定して、計算を行ってみた。具体的には、12の指標に関する回答者の「実感」(1)とても実感できている」「まったく実感できていない」(5段階)を説明変数に、幸福感を被説明変数として、順序ロジスティック回帰分析を行った。モデル

	あなたにとって重要なものかどうか(1)の答え以外で2(2)まで	あなたにとって重要なものかどうか(2)の答え以外で3(3)まで	あなたにとって重要なものかどうか(3)の答え以外で4(4)まで	あなたにとって重要なものかどうか(4)の答え以外で5(5)まで
☆自分自身の健康が良好である(あるいはよい方向に向かっていること:以下同)	75.1	13.0	4.6	2.0
☆家族・知人の健康が良好である	57.0	24.5	6.8	2.8
☆お金がある	17.1	39.8	21.0	9.4
☆よい家庭が築けている	12.1	42.6	17.2	8.9
近隣との関係が良好である	1.0	6.3	24.3	23.6
☆友人関係が良好である	2.6	12.9	37.8	18.9
仕事での人間関係が良好である	1.6	7.3	26.3	21.9
社会から評価されている	0.7	2.4	9.8	21.9
よい社会だと納得できる	2.2	5.9	19.4	27.8
☆自分自身がこうありたいと思っているような自分である※自分が成長している、何かを成し遂げた、成し遂げようとしているという実感も含む	6.1	8.6	24.0	24.1
☆自分の大切だと思っている人が幸せである	7.1	13.4	21.7	23.8
☆束縛されず自由である	3.6	6.6	16.9	29.2
あてはまるものはない	2.7	3.0	4.4	18.2

(出所)図1と同じ

【図2】幸福を感じるために重要なもの

【図4】12指標を用いた因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子
友人関係が良好である	0.722	0.179	0.187
近隣との関係が良好である	0.680	0.216	0.129
よい家庭が築けている	0.585	0.202	0.311
自分の大切だと思っている人が幸せである	0.524	0.306	0.387
仕事での人間関係が良好である	0.487	0.426	0.139
束縛されず自由である	0.320	0.231	0.295
社会から評価されている	0.336	0.741	0.090
よい社会だと納得できる	0.124	0.628	0.163
自分自身がこうありたいと思っているような自分である	0.349	0.513	0.290
お金がある	0.159	0.423	0.333
家族・知人の健康が良好である	0.270	0.132	0.709
自分自身の健康が良好である	0.148	0.199	0.694

因子抽出法：最尤法
 回転法：Kaiserの正規化を伴わないバリマックス法
 (出所)図1と同じ

12の指標はお互いに高い相関を持つと述べた。その構造はどうなっているのかを理解するため、これらの指標に因子分析を行い、固有値が1以上という条件の下、3つの因子を抽出した(バリマックス回転によって軸を回転させている)。その結果、第1因子には「友人関係が良好である」といった、人間関係に関わる因子が抽出された。第2因子には「社会から評価されている」といった、社会性に関わる因子が抽出された。第3因子は「健康」に関わる因子が抽出された(図4)。

ちなみに、この因子のポイントを回答者毎に計算し、それを説明変数として(被説明変数は幸福感)、順序ロジスティック回帰分析を行ったところ、同様の結果を得ることができた。情報が豊かに得られる場合には、このような方法も一考の余地がある。

ル自体に問題はあるものの、個人にとって重要な生活項目が、幸福感とどのような関係にあるかを見たいという動機から計算を実施した。

12の指標全てを説明変数に組み込むと、係数がマイナスになるなど、理論上説明のつかない問題が発生するので、変数(指標)を取捨選択し、8つの変数を用いた(図2で☆のついた指標)。説明変数の数値をモデル式に代入することによって得られる(幸福感の個人別)予測値が「正解」である確率が46.5%、正解も含め、誤差が1ランク以内におさまる確率は86.8%。残りの13.2%は誤差が2ランク以上の、はずれとなる(図3)。

当然、より少ない情報で正確な予測ができることが望ましい。検討の結果、2つの指標だけで幸福感をある程度予測できるところが分かった(正解が44.3%、誤差1ランク以内が85.7%)。その際必要となる2つの指標とは「よい家庭が築けている」と「お金がある」である。

誤差1ランク以内が85%というと、非常に高い正解率のように思われるかもしれない。しかし、実際の主観的幸福感の分布を見ると、「どちらかといえば幸せ」に全体の41.2%が集中している。つまり、無条件に全員を「どちらかといえば幸せ」だと予測してしまえば、確実に41.2%の正解率が得られるということになる。それを基準とすれば、2指標を利用することで向上する正解率は3%、8指標を用いても5%強にすぎない。

同様に、「どちらかといえば幸せ」の誤差1ランク以内である「幸福である」には20.2%、「どちらともいえない」には18%の回答が集中しているため、3ランク合計で79.4%になる。したがって、誤差1ランク以内の正解率に関しては、2指標利用で6%の改善、8指標

標利用で7%の改善

ということになる。

このように、予測の正解率という面だけでいえば、劇的な改善効果があるわけではない。しかし、情報なしで最もシニアの大きい「どちらかといえば幸せ」一本に絞るよりも多様な予測が得られることに意味があると考えるべきであらう。

とはいえ、2指標採用では5000人中3753人、

8指標採用でも3

326人が「どちらかといえば幸せ」予測カテゴリーに入っている(実際は2060名)。特に「非常に幸せ」「まったく幸福ではない」という両端の予測値は算出されにくい。これは、指標が持つ情報量だけでは幸福感を説明するために不十分であるということかもしれないし、回答者の各指標に対する重みづけが異なることが原因かもしれない。ロジスティック回帰モデルの限界ということもありえよう。

いずれにせよ、制限はあつつも、ある個人の幸福感を予想する実

践的な方法として役に立つのは、「よい家庭が築けているか」と「お金があるか」に対する実感をたずねることだという結果を得た。既に述べたように、健康は衛生要因であり、欠如している場合には幸福感を大きく引き下げる要因になるだろう。そのような非対称の要因は、モデルにはうまく反映できず、重要にもかかわらず、活用できていない。それは定性的に考慮すべきである。

「よい家庭が築けているか」と「お金があるか」という要因は、実感としても幸福感の判断に大きな影響を与えるという妥当性はあり、実際に自由回答でも両者に関する言及が多い。しかし、実践的に有用であるということ、それが他の要因よりも重要であるということとは違う。モデルの制約からうまく取り込めなかったという可能性を忘れてはならない。

おわりに

他の要因と比較してという意味ではなく、「よい家庭が築けているか」と「お金があるか」が幸福感醸成に重要であるであろうという仮説は意味があるはずだ。そう考えれば、社会がGDP(国内総生産)という指標を重視していることは、十分妥当性があるといえる。

一方で「家族」は個人的な問題であり、社会の課題として十分認識されてこなかったように思う。もちろん、社会保障といった形での関わりはあるものの、それだけでは不十分な、国や自治体では目の届かない側面に、もっと注目すべき点があるはずだ。幸福感から学ぶ余地は大きいと考えている。

(大阪ガス株式会社エネルギー・文化研究所 研究員)

【図3】モデルによる幸福感予測と実際の回答との関係

モデルによる予測	実際の回答							合計
	非常に幸福である	幸福である	どちらかといえば幸福である	どちらかといえば幸福ではない	幸福ではない	全く幸福ではない	(人)	
非常に幸福である	5	3	4	3			15	
幸福である	87	332	201	30	7	3	660	
どちらかといえば幸福である	50	647	1686	625	203	82	3326	
どちらともいえない		21	139	171	139	96	592	
どちらかといえば幸福ではない	2	6	15	33	42	35	144	
幸福ではない		2	14	28	43	66	197	
全く幸福ではない			1	8	13	19	66	
合計	144	1011	2060	898	447	301	5000	

(出所)図1と同じ